青森県総合学校教育センター　研究紀要　［2013.3］
Ｆ２－０１

高等学校

高等学校における言語活動の充実を図る指導法に関する研究

高校教育課　　指導主事　　千葉　努（執筆責任者），安田　聡子，
川崎　淳平，作田　宏之

要　　旨

本研究では，文献研究と県内の県立高等学校教員に対するアンケート調査から，言語活動を活かした授業がどのように行われているかを分析し，また，研究協力校において実施した検証授業の結果から各教科における効果的な取組は何かを検討する。さらに，それらの結果を基に効果的と思われる指導法を考察し，提案したものである。

キーワード：高等学校　言語活動　国語　地理歴史　理科　外国語

Ⅰ　主題設定の理由

平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「新学習指導要領」という。）では基礎的・基本的な知識・技能の習得を基盤とし，その基盤の上に思考力・判断力・表現力等を育むことが重視されている。中でも，各種調査の結果から問題があると示された，思考力・判断力・表現力等の育成については，中央教育審議会答申（2008）において，①体験から感じ取ったことを表現する，②事実を正確に理解し伝達する，③概念・法則・意図などを解釈し，説明したり活用したりする，④情報を分析・評価し，論述する，⑤課題について，構想を立て実践し，評価・改善する，⑥互いの考えを伝え合い，自らの考えを発展させる等の学習活動が重要であることが示されている。そして，これらの学習活動の基盤となるものは，数式などを含む広い意味での言語であり，その中心となるのは国語ではあるが，すべてが国語科の役割というものではなく，理科の観察・実験レポートや社会科の社会見学レポートの作成や推敲，発表・討論などすべての教科で取り組まれるべきものであり，そのことによって子どもたちの言語に関する能力は高められ，思考力・判断力・表現力等の育成が効果的に図られるとしている。そこで，本研究では，平成25年度入学生から年次進行により全教科で新学習指導要領が適用されることから，思考力・判断力・表現力の育成のため，国語，地理歴史，理科，外国語について言語活動を活かした授業を構築し，言語活動の充実を図る指導法に関して研究することとした。

Ⅱ　研究目標

本県の県立高等学校における，言語活動の充実を図る授業の在り方に関する調査・分析を通して，授業における課題を明らかにする。さらに，その分析結果を基に，言語活動を活かした授業を構築し，検証授業を通じて効果的な指導法を考察し，言語活動を活かした授業についてまとめる。

Ⅲ　研究の実際とその考察

１　アンケート調査の実施

言語活動の充実を図る授業についての実践と課題を探るため，アンケート調査を実施した。

(1) 調査について

ア　対象　青森県内普通高校31校，総合学科設置高校３校，専門高校９校に在職する国語，地歴公民，数学，理科，保健体育，芸術，外国語，家庭，情報の各教科担当教員（計473人）

イ　方法　選択式（一部記述式）〔回収率100％〕

ウ　内容

設問１　言語活動を活かした授業について，現在，行っている授業におよそあてはまると思われるもの

を選択及び実践例の記入。また，設定している場合，具体的にどのような活動をしているか。

（１）年間の授業の中で，「思考力・判断力・表現力」を育成するための言語活動を活かした授業の割合はどのくらいか。

５＝50％以上，４＝40％，３＝30％，２＝20％，１＝10％以下

（２）言語活動を活かした授業の設定が10％以下の理由は何か。

ア＝言語活動を活かした授業をする時間がない。　イ＝教科の特性上設定しにくい。

ウ＝言語活動を活かした具体的な指導方法が分からない。　エ＝その他

設問２　今後「思考力・判断力・表現力」を育成するための言語活動を活かした授業の割合を年間およそどのくらいにしたいか。

５＝50％以上，４＝40％，３＝30％，２＝20％，１＝10％以下

設問３　言語活動を活かした授業として，今まで行ったことがあるもの，効果的だと思われるものは何か。

１　帰納・類推，演繹などの推論を用いて，説明し伝え合う活動を行う。

２　日常生活の中で気付いた問題について，自分の意見をまとめ，説得力ある発表をする。

３　社会生活の中から話題を決め，それぞれの視点や考えを明らかにし，資料等を活用して話し合う。

４　グループで協同的に問題を解決するため，学習の見通しを立てたり，調査や観察等の結果を分析し解釈したりする話し合いを行う。

５　新聞，読み物，統計その他の資料等の根拠に基づいて考えをまとめレポートを作成する。

６　実験や観察の結果，調査結果などを整理・重点化し，相手に分かりやすく，ポスターやプレゼンテーション資料などに表現する。

７　テーマを決めて複数の本や資料等を読み，内容を比較したり，批判的にとらえたりするなど，知識や考えを深める。

(2) 考察

ア　設問１（１）について，「思考力・判断力・表現力」を育成するための言語活動を活かした授業は国語，外国語で多く設定されているものの，数学，体育では全体の５割，地理歴史，公民，理科では全体の３割しか，言語活動を活かした授業を設定しておらず，講義（体育の場合は実技）中心の授業が展開されていると推測される。

イ　設問１（２）について，言語活動を活かした授業の設定が少ない理由として，「時間が少ない」という答えが最も多く各教科とも全体の５割前後を占めている。また，「教科の特性上設定しにくい」及び「具体的な指導方法が分からない」は各教科でバラツキはあるものの，平均すると２割前後の教員が選択しており，言語活動を活かした授業を時間的にも内容的にも不安があるために設定できないと推測できる。

ウ　設問２について，今後の言語活動を活かした授業の割合は，各教科とも現在よりも概ね 10％前後増やしたいという意見が多く，現在の状況に満足していないと考えられる。

エ　設問３について，国語，地理歴史，公民，外国語では「新聞，読み物，統計その他の資料等の根拠に基づいて考えをまとめレポートを作成する」の活動が効果的であると考えている。また，数学では，「帰納・類推，演繹などの推論を用いて，説明し伝え合う活動を行う」の活動が効果的で，理科では「実験や観察の結果，調査結果などを整理・重点化し，相手に分かりやすく，ポスターやプレゼンテーション資料などに表現する」の活動が効果的であるとそれぞれ考えている。

このように，教科により効果的な指導法に違いがあることから，教科の特性を活かした指導方法を示す必要があると考える。

２　言語活動を活かし，思考力・判断力･表現力を伸ばす指導法の研究

アンケート結果の分析から，各教科において言語活動を活かした授業の実施状況にバラツキはあるものの，いずれの教科においても「言語活動を活かした授業をする時間がない」及び「言語活動を活かした具体的な指導方法が分からない」という意見があった。そこで，今回は国語，地理歴史，理科，外国語についてこの現状を改善するため指導法を研究し，検証授業を通してその有効性を検証した。

(1) 国語

ア　アンケートの結果から見える課題

設問１（１）の言語活動を活かした授業の割合の結果を見ると，右の表１のように年間30%以上実施している割合が67%で，国語科では言語活動を活かした授業が概ね行われているといえる。また，設問３について，「行ったことがある」及び「効果的である」の数が多いのは，「自分の意見をまとめて発表する」（項目２）及び「根拠に基づいて考えをまとめる」（項目５）の活動である。その具体的な実践例として，「感想をノートに書く」，「小論文形式で自分の意見をまとめる」及び「スピーチをする」などが多く見られた。一方，「行ったことがある」及び「効果的である」ともに数が少なかったのは，「グループで話合いを行う」（項目４）活動であった。以上の結果から国語の授業では，生徒が自分の考えをまとめて記述したり，発表したりする場面は多く設定しているものの，その多くは，各自が自分のノートに意見を書いたり，教員の発問に対して発表したりするなどの活動であって，ペアやグループで話合いを行う活動は，少ないことが分かった。

表１　言語活動の割合（国語）

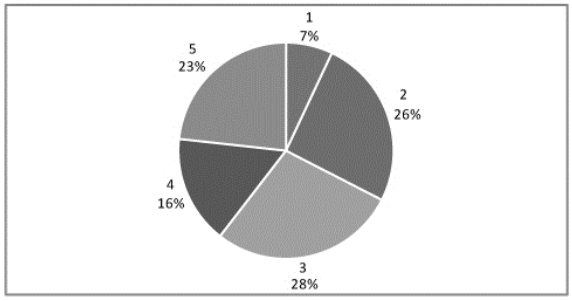
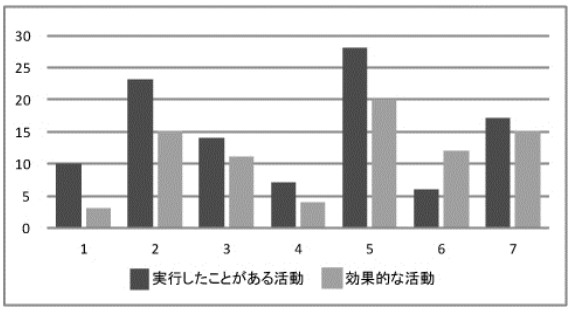


表２　言語活動を活かした活動（国語）



イ　課題解決の方向性

事前アンケートでは，言語活動を活かした授業が概ね行われているという結果が出ているものの，生徒が自分の考えを表現する活動が，生徒同士が交流して互いに考えを深め合う段階まで至っていないのが現状である。そこで，ペアや少人数のグループで話し合い，考えを深める学習場面を積極的に設定する必要があると考える。

ウ　検証授業での検証事項

ａ　生徒が自分で問題を考え，その解答及び解説を作成する言語活動が，思考力・判断力を深める学習として効果的か。（※１）

ｂ　グループ内で付箋を使って話し合うことが，思考の道筋を互いに確認し，交流する手段として効果的か。（※２）

エ　検証授業の対象集団

学校規模：１学年７クラスの高等学校／対象学年：普通科２年生

オ　検証授業の内容（一部）　科目：古典　単元：伊勢物語「初冠」

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等
展開	・自分で考えた問題の発表（班活動）	・司会役の生徒は、ワークシートⅢの手順に従って話し合いを進めることを班員に確認する。 ・各自が考えた問題・解答・解説等を、付箋を利用して発表する。 ・司会役の生徒は、各発表の後に、質問がないか確認する。 ・本文中の同じ箇所からの問題をグループにまとめる。 ・問一、問二、問三のつながりに注意して並べる。	・ワークシートⅢの手順に従って話合いを進めるよう指示する。 ※１	・班の話合いに積極的に参加し和歌に込められた詠み手の心情を理解できる問題・解答・解説等を選ぶ活動に意欲的に取り組もうとしている。 【関心・意欲・態度】 （評価方法：机間指導における観察） ○具体的な評価規準 ①付箋を使い、自分の考えを発表することができる。 ② 付箋をグループにまとめてその中からよりよい問題・解答・解説等を選ぶ活動に積極的に取り組んでいる。
	・問題・解答・解説の選択（班活動）	・グループにまとめた問題の中から、ワークシートⅢの観点①～⑤に従って、問題・解答・解説を選ぶための話合いを行う。 ・右の①～⑤の観点に従って、司会者が中心となり、意見を出し合う。	・ワークシートⅢの観点①～⑤（下記）に従って選ぶことができているか机間指導を行う。 ①科書の記述から離れていないか。 ②和歌と地の文の関連が押さえられているか。 ③問一、問二を解くことが問三を解くことのヒントとなっているか。 ④詠み手の心情をより深く理解できる問題となっているか。 ⑤解答・解説・採点基準は分かりやすく納得できるものになっているか。 ※２	・地の文と和歌の関係を理解して、詠み手の心情をとらえるような問題・解答・解説等を考えている。【読む能力】 （評価方法：ワークシートの記述分析） ○具体的な評価規準 ①班での話合いをもとに詠み手の心情を理解できる問題・解答・解説等を作成している。 ②班で話し合われたものだけでなく、新たな視点を盛り込んだ解説を考えて書いている。

カ　検証授業での生徒の様子

大部分の生徒が，自分の考えた問題及びその問題の解答・解説を発表できていた。また，班の司会の進行に従って，それぞれの付箋に書いた内容を検討し，適切な順番に並べ替えたり，共通部分があるものをまとめて足りない情報を書き足したりしながら，よりよい問題や解答・解説になるよう意欲的に話し合う様子が見られた。話合いの過程においては，「『本歌取り』って何？」など，和歌の解釈に必要な基礎的な知識を確認し合う姿や，「文法事項の解説を入れた理由」などを説明する姿がグループ内で見られた。講義形式の授業では質問しづらい基礎的・基本的な事項であっても，少人数の集団では気軽に質問することができるようである。また，このような活動が，質問した生徒にとっては知識の習得に，質問に答えた生徒にとっては知識の定着につながると考える。一方，発表から話合いの過程で，特に議論になる場面もなく淡々と学習が進み，活動を早々に終えてしまう班もあった。

キ　検証授業の結果

授業後の生徒対象アンケートの結果では「授業内容が理解できた」，「考える時間が多かった」及び「クラスメイトの意見を聞くことは，自分の考えを確かめたり整理したりするのに役立った」など肯定的な評価が９割以上という結果となった。具体的な感想では，「問題を考えることで，本文を暗記するぐらい読み込むことができた」，「本文の内容をしっかり理解しないと問題が作れないので，難しいけれども，その分授業に集中しようと思えた」及び「普段なら深く考えない要素も確認しながら問題を考えた」などがあり，問題を作成するために文章を読むという「読む目的」を明確にした言語活動を設定することが，理解力を高め，思考力・判断力を深める学習として効果的であるという結果が得られた。

さらに「友達と話し合うことで，自分の考えを確かめ，内容についての理解が深まった。大変だったがおもしろかった」という意見や，「同じ問題でも，それぞれの見方があって，どれが正しいかどうかを考えるだけでなく，その人がなぜそう考えたかを知ることも大事だと思った」という意見から，グループ内で話し合う活動が生徒の興味・関心を促すだけでなく，思考の道筋を互いに確認し合う手段として効果的であるという結果が得られた。

また，今回の検証授業を参観した国語科教員（９名）対象アンケートの結果では，「生徒同士が話し合うグループ活動などを行うことで，生徒の思考力・判断力・表現力は高まると思うか」という質問に対し，「とても高まる」が６名，「少し高まる」が３名と，全員から肯定的な評価を得られた。

ク　課題

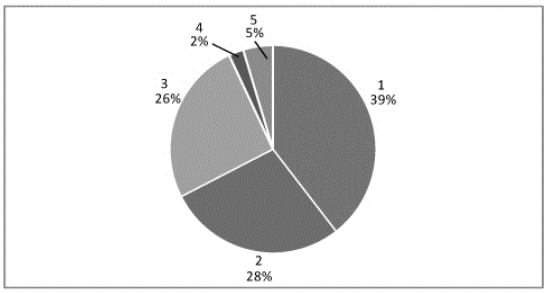
今回の学習指導要領の改訂により，高等学校学習指導要領解説国語編（2010）では，各科目及び領域の内容の指導に当たって，言語活動を通して指導することを一層明確にしている。今回の検証授業からも，文章を読んで終わりではなく，問題を作成するために文章を読むという，目的が明確な言語活動を設定することが生徒の思考力・判断力を育むことに効果があると予想される。しかし，一見活動自体がスムーズに進んでいても，生徒同士の思考レベルに大きな差はなく，議論の高まりがないまま学習が終わってしまう場面が見られた。学習課題の設定については，いかに生徒の思考を刺激する内容の課題を設定するか，さらに工夫が必要である。国語の授業においては，言語によって思考し，判断し，表現する学習活動が行われる。また，身に付けるべき技能も言語の技能である。このことから言語活動が常に行われていると考えてしまいがちであるが，その言語活動が生徒に身に付けさせたい力にふさわしいかどうかを十分に吟味し，計画的に指導する必要があると思われる。

(2) 地理歴史

ア　事前アンケートの結果から見える課題

地理歴史は，世界史・日本史・地理の各科目とも学習事項が多いという教科の特性から，教員主導の講義形式の授業がどうしても多くなる傾向にある。言語活動を活かした授業を行っている割合が10％以下の教員に，実施していない理由を聞いた設問２でも，その62％が「時間がない」と答えている。一方で，言語活動を取り入れた授業をやってみたい，増やしたい，と考えている教員も多いことから，限られた授業時数の中で，いかに言語活動の場面を設定できるかが課題となっている。

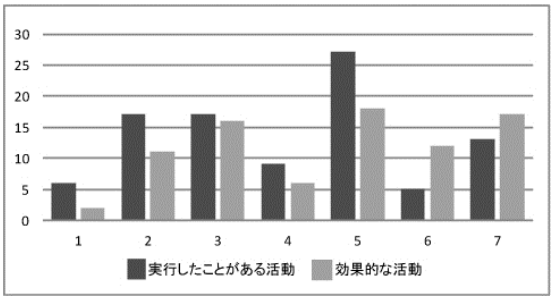
表３　言語活動の割合（地理歴史）



イ　課題解決の方向性

事前アンケートによると，言語活動を活かした活動事例では，右の表４のとおり，「新聞，読み物，統計その他の資料等の根拠に基づいて考えをまとめレポートを作成する」（項目５）活動が最も多く行われており，かつ効果的だと考える割合も高くなっている。これらの結果と「時間がない」という大半の地歴科教員の意見から，短時間でも生徒が主体となって行える課題解決的な言語活動を，計画的かつ効率よく日常の授業に組み込んでいくことが必要と考える。

表４　言語活動を活かした活動（地歴公民）



ウ　検証授業での検証事項

ａ　生徒たちは言語活動を伴った学習に，どの程度主体的に取り組めるのか。（※１）

ｂ　短時間であっても協議や討論といった言語活動を通じて，生徒の思考力・判断力・表現力は高まるのか。（※２）

エ　検証授業の対象集団

学校規模：１学年６クラスの高等学校／対象学年：普通科３学年

オ　検証授業の内容（一部）　科目：地理　単元：市町村規模の地誌

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等
展開	⑤地域調査のテーマ設定 黒石の名物・特産品から地域調査のテーマを設定しよう。 今の黒石は何が問題か？（地域の課題から地域調査のテーマをもう一つ設定してみよう）	・冒頭で記入した黒石の名物、特産品を記入した黒石の財産マンダラから好きなテーマを一つ選択し、それを基により具体的な調査テーマ（この場合、米に関係する事象）をグループ内で順番に書き込む。 ・グループ内で相談し、調査テーマを一つに絞り、発表する。 （例） 「自分たちは黒石の特産である米に着目し、市内を流れる用水路の経路を調べてみたいと思います。」 ・黒石の課題マンダラに、思い当たる町の課題をグループ内で順番に書き込む。 ・グループ内で相談し、黒石が抱えている課題の面からも調査テーマを一つ設定し、発表する（この場合、空洞化の何を調べるか）。 （例） 「自分たちはさっきのスライドにあった大黒屋デパートやシャッター街と化した中心部の写真を見て、店舗数の変化と空洞化が進んだ理由や背景について調べてみようと思います。」	・自由に話し合える雰囲気作りに留意する。 （例） 消費量の変化は／農業用水はどこから／減反の状況は いつ頃から栽培／米／農家の平均年齢 消費量の変化は／品種の歴史／米以外の有力作物 ・決まった調査テーマを発表させる。 （例） 空洞化／道が狭い／遊び場が少 買い物は弘前／黒石の課題／人口減 少子高齢化／働く場所少／市の借金 （例） 各町内の営業店舗の数／まちこの歴史／郊外店の進出 車社会／空洞化／駐車場の少なさ 経営の後継問題／地価の変化／特色ある店が少 ・決まった調査テーマを発表させる。 ・課題をベースにした調査テーマについては、その解決策も調査と並行しながら考えていくことを指示。	米をテーマにしたとしても、まだ米の何を調査するのか漠然としている。マンダラの中心に大テーマである「米」を記入し、その周囲8マス内に、より具体的な調査テーマを（米に関連する事象であれば何でも構わない）制限時間3分で自由に記入させる。すべて埋まらなくても良い。 ※１　※２ 事後の評価も考え、マス目の隅に生徒の名前やサイン、印等を記入させる。 【関心・意欲・態度】 ・二つの調査テーマを設定することができたか（後日、一つに絞り込む）。 十分満足できる状況（Ａ）の例 …調査の動機が明確で、黒石市の素晴らしさを認識できたり、喫緊に調査・解決すべき内容となっているもの。

※特別な授業という位置付けではなく，あくまで年間指導計画の流れに沿った普段の授業の一部分に言語活動を導入（「都市・村落」の学習が終わり，「地域調査」の１時間目という位置付け）した。

※前時までの学習内容と科目間連携に配慮し，生徒達が暮らす地元を題材に，地域の地形や都市の成り立ち，歴史について，プロジェクタで映しだした地形図や景観写真を活用しながら学習を進めた。

※地域調査の導入として，３～４名程度で生徒同士がワークシートを基に自由に発表・協議しながら，地域の特徴と抱えている課題を探究し，話し合われた内容から地域調査の調査テーマを設定した。

カ　検証授業での生徒の様子

住み慣れた地元地域の特徴や課題を題材に言語活動を行ったため，各グループとも予想以上に熱心に協議していた。導入時にアイスブレーキングも兼ねて地元の名物・特産品をグループ内で挙げさせたが，友人の発表内容を聞いて初めて知ったという情報も数多くあったようである。

図１　調査テーマの記入作業

各グループで作成したワークシートを見ると，地域の課題を挙げるところまではできてはいたが，過疎化や中心商店街の空洞化など，全国共通に見られる

人口減少や景気後退に起因する課題が大半であった。時間的な問題で，地域調査のテーマ設定にまでは至らなかったグループもあったが，「地域の財産であるこみせ通りの現状と今後の活用方法」など，地域の活性化や抱える課題の解決につながるような未来志向の調査テーマも挙げられた。

図２ グループ協議の様子

キ　検証授業の結果

授業後のアンケート結果では，「授業がよく理解できた」，「考える時間が多かった」及び「クラスメイトの意見を聞くことが役立った」など，肯定的な評価がいずれも９割以上という結果となった。授業の内容理解もさることながら，「グループで話し合うことで自分と他人の意見を比較できるため，自分一人では思いつかないようなよい意見を出すことができた」など，言語活動が新しい気付きをもたらし，思考の整理にも有効であるといった感想も見られた。また，授業者からは「思った以上に活発に話合いが行われ，生徒の新たな一面を知ることができた。その活き活きとした様子から，生徒同士が話し合う等のグループ活動が，思考力・判断力・表現力に何らかの刺激を与えていることは間違いないと思う。」といった意見も出された。言語活動の頻度に関するアンケートについては，「週に１～２度程度」と「月に１～２度程度」が半々で，「やりたくない」という回答の生徒はいなかった。以上のように，言語活動を伴った学習は生徒の思考を刺激し，授業に対する満足感を高めることが分かった。

ク　課題

今回の検証授業実施に当たり，筆者は講義形式中心の旧態依然の授業しかやってこなかったため言語活動を伴った授業のイメージはもちろんのこと，生徒が言語活動に対してどれだけ主体的に取り組めるのかについても全く予想がつかなかった。このため，生徒にとっても教師にとっても言語活動のイントロダクションとして，まずは自分の意見を発表する，他者の意見を聞いて解釈する，グループの意見をまとめる，といった初歩的な活動にあえてとどまった。しかし，言語活動のハードルを下げたことから，「なぜそうなるのか」といった課題解決的に思考を深める段階にまでは至ることができなかった。また検証授業ということで，50分授業のうちのおよそ15分をこれらの活動にあてたが，毎時間，これほどまでの時間を確保するとなると，学習の進度にも多分に影響が出ると思われる。このため地理歴史科の授業に言語活動を取り入れるには，何よりもまず学習内容の精選と，いつどのようなテーマでどういった言語活動を設定するかについて綿密な計画が求められる。５～10分の短い時間でも，生徒が主体的に思考・判断・表現できるような良質な課題設定も必要となってくる。

(3) 理科

ア　アンケートの結果から見える課題

右の表５の事前アンケートの設問１の結果を見ると理科の授業において言語活動を活かした授業を行っている割合は，10%以下で３割，20%以下では５割となっており，言語活動を活かした授業があまり実施されていない状況であると言える。また，言語活動を活かした授業を実施している割合が10%以下の教員に，実施していない理由を聞いた設問２では64%が時間がないと答えている。しかし，10%以下と答えた教員の中でも約半数は現在よりも言語活動を活かした授業の割合を多くしたいと考えており，時間の制約を解消する必要があると考える。

表５　言語活動の割合（理科）

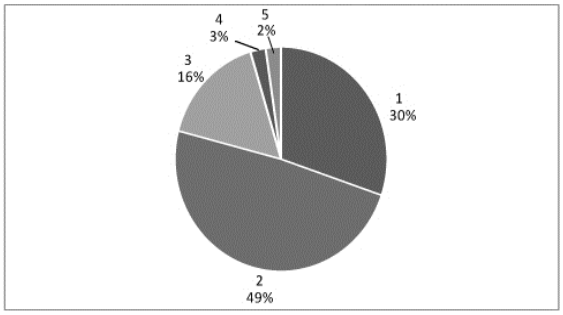
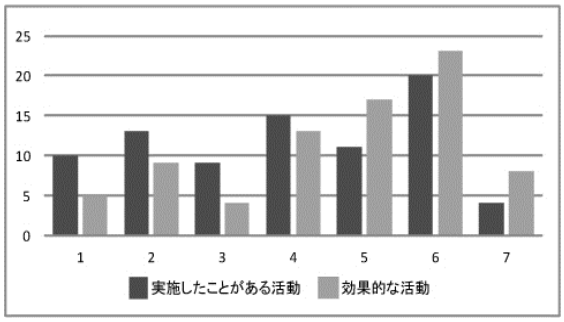


表６　言語活動を活かした活動（理科）



イ　課題解決の方向性

事前アンケートで行った，言語活動を活かした活動として７項目を提示したところ，右の表６の「実験や観察の結果，調査結果などを整理・重点化し，相手に分かりやすく，ポスターやプレゼンテーション資料などに提示する。」（項目６）では，実際に行ったことがあり，効果的であったという割合が多かった。これらの結果から，理科の特徴である実験・観察を効果的に取り入れるとともに，表現させる場面を積極的に設定する必要があると考える。また，言語活動を行

う時間がないという意見に対応するためにも，短時間で言語活動の効果が得られる設定を行う必要があると考える。

ウ　検証授業での検証事項

a　提示した実験が生徒に思考させ，表現させるのに適切な題材であり，実験結果の理由を記述，発表させることが表現力の育成につながるのか。（※１）

b　個人及びペアワークでの思考場面が，思考力・判断力を深める場となるのか。（※２）

エ　検証授業の対象集団

学校規模：１学年６クラスの高等学校／対象学年：普通科２学年

オ　検証授業の内容（一部）　科目：地学　単元：地震

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等
展開	○野島断層 ・兵庫県南部地震で生じた野島断層にはどの方向からどのような力が働いたかを考える。	・「どの方向から力が働き断層が生じたか。」を予想し、ワークシートに記入する。	・野島断層について質問。 ※「どの方向から力が働き断層が生じたと考えられるか。」 ・「どの方向から力が働き断層が生じたと考えられるか。」の答えを予想しワークシートに記入するよう指示する。	※１
	【実験】 ヨーグルトの容器を左右から押しどのように切れたかを上から見て観察する。さらに、ヨーグルトの一部をスプーンで取り、断面の様子を観察する。 ①上方から見て、押した方向に対し、断層が斜めに切れているのが観察できる。 ②断面方向から見て、上下方向のズレが生じるのが観察できる。 ③断面方向から見て、断層が斜めに切れているのが観察できる。	・左右からヨーグルト容器を押し上部から切れ方の様子を観察する。 ・断面の様子を観察する。 ・上から観察したときの切れ方をワークシートに図示する。 ・観察の結果及び気がついたことを、ワークシートの該当する場所に記入する。	・左右からヨーグルト容器を押し上部から切れ方の様子を観察するよう指示する。 ・断面の様子を観察するよう指示する。 ・上から観察したときの切れ方をワークシートに図示するよう指示する。 ・観察の結果及び気がついたことをワークシートの該当する場所に、記入するよう指示する。	◎簡易実験を通し断層と加えた力の関係を考え、その関係を説明できるとともに、過去の自然現象と対比して説明することもできる。 【関心・意欲・態度】 ・評価の方法 机間指導におけるワークシートの記入状況及び付箋の貼付け状況より評価する。さらに、提出されたワークシートにより評価する。
		・２人で検討する。 ・指名された生徒は板書する。	・２人で検討するよう指示する。 ・指名し板書するよう指示する。	※２

※今回は時間的な制約を考慮し，簡易な実験結果を個人で予想し，ペアワークを通して考えを深め，その結果を発表するという授業展開とした。

カ　検証授業での生徒の様子

普段，講義中心の授業で実験を行う機会が少ないことと，ヨーグルトという身近な食品を使ったことで，簡単な実験にも興味をもち積極的に取り組む生徒が多かった。また，ヨーグルトに現われた結果を丁寧に観察させ，問題解決のヒントになるように質問を設定したことで，既習事項から思考し，判断する生徒もいたと思われる。しかし，教員，生徒ともにペアワークに慣れていないことで，ペアワーク中に教員が答えを誘導する場面があり，ペアワークを通しての思考の深まりが不十分であったペアが多少あった。

キ　検証授業の結果

授業後に行った生徒対象のアンケートの結果によると，「授業がよく理解できた」，「考える時間が多かった」及び「クラスメイトの意見を聞くことが役立った」など肯定的な評価が７割以上という結果となった。つまり，実験を行うことで考える場面が設定され，クラスメイトとの対話による言語活動を通して，自分の意見を確かめたり整理したりすることで思考を促し，授業内容の理解につながったものと考えられる。また，アンケートでは今回の言語活動を，月に１～３回は設定して欲しいという意見が７割あり、この点においても肯定的な評価が得られた。年間では約２～３割設定が必要であり、この点は事前アンケートの設問２の教員が今後必要と考える設定時間の割合とも一致している。一方，教員対象の授業後アンケートでは，「生徒同士が話し合うグループ活動などを行うことで，生徒の思考力・判断力・表現力は高まると思うか」という質問に対し，参観教員（５名）全てが「高まる」という肯定的な意見であった。しかし，今回の授業ではペアワークの時間を明確に設定しなかったことで，予定した内容を終えることができなかったことから、設定時間に工夫が必要であるという意見が多い結果となった。

ク　課題

今回の学習指導要領の改訂により，高等学校学習指導要領解説理科編理数編（2009）では，思考力・判断力・表現力を育むために観察・実験，レポートの作成，論述など知識・技能の活用を図る学習活動をその発達段階に応じて充実させることを述べている。今回の検証授業からも観察・実験を活用し言語活動を取り入れた授業を行うことは，思考力・判断力・表現力の育成に効果があることが予想される。しかし，今回設定したペアワークの手法を上手く活用できず，言語活動を通した思考が不十分になる場面や，言語活動の時間設定を明確に示さなかったことで，時間不足になる場面が見られた。この点については，生徒が主体となって話し合い，発表する場面を設定した授業を普段から積極的に行うことが必要であり，今回の授業結果をもとに指導方法に検討を加える必要があると思われる。また，事前アンケートから「時間がない」ことが，言語活動を活かした授業を行っていない理由の一つとなっているが，ペアワークの実施方法や時間設定を工夫することにより，時間的な問題は十分解決できるという手応えも感じ，時間内で終えられる内容に改善できると考える。また，実験については各単元の中にバランスよく取り込めるように授業計画を立てるとともに，効果的な実験方法及びそれを利用した言語活動を取り入れた指導方法についても検討していく必要があると考える。

(4) 外国語

ア　アンケートの結果から見える課題

事前アンケートの設問１の結果を見ると，英語の言語活動を行っている割合は，50%以上が約２割，30%以上が約３割，40%以下が約１割で，比較的活発に言語活動が実施されていることが分かった。次に言語活動の内容を調査した設問３の結果を見ると，実施したことがある活動として「日常生活の中で気付いた問題について，自分の意見をまとめ説得力ある発表をする」（項目２）が最も多く，次いで「新聞，読み物，統計その他の資料等の根拠に基づいて考えをまとめレポートを作成する」（項目５）であった。しかし，効果的な活動としては項目２よりも項目５の方が効果的であると答えている割合が高くなっている。

表７　言語活動の割合（外国語）

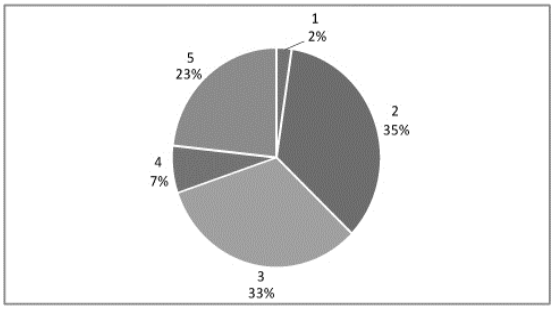
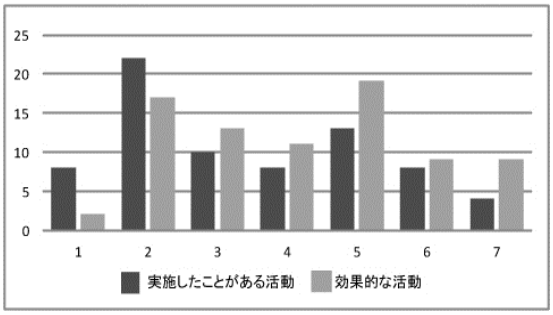


表８　言語活動を活かした活動（外国語）



イ　課題解決の方向性

言語活動を活かした活動の中で効果的であると答えている割合が高かった項目５が項目２に比べて実施率が低いのは，生徒の学力に合った資料を見つけるのに時間がかかり，生徒が英語でまとめた考えを効果的な言語活動につなげる教材にする準備が難しいからではないかと考える。このため，項目５の活動をより多くの授業に取り入れて活用するためには，この問題を解消した具体的な指導法を考察する必要があると考える。そこで，特別な資料を準備して言語活動を行うのではなく，教科書の素材を活用して準備した教材を使った活動を，普段の授業の流れの中で実施し，生徒のアンケート結果から，その効果を判断する必要があると考える。

ウ　検証授業での検証事項

ａ　教科書の内容を生徒に思考・判断させた後，自らの考えを表現する場面が適切に設定され，考えを深める言語活動へとつなげることができるか。（※１）

ｂ　ペアワーク及びグループワークで，思考力・判断力を深めることができるか。（※２）

エ　検証授業の対象集団

学校規模：１学年７クラスの高等学校／対象学年：普通科１学年

オ　検証授業の内容（一部）　科目：英語Ⅰ　単元：Lesson10 To Give or Not to Give

カ　検証授業での生徒の様子

普段，グループワークで教科書の内容を確認していく機会がほとんどなかったが，仲間の意見を参考にしながら正確に内容を把握しようとする姿が多く見られた。また，「臓器移植」という難しいテーマであったが，仲間と協力しながら，きちんとした理由に基づいて「臓器移植」に対する自分の意見を表

現し，意欲的に発表しようとする生徒も多かった。

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等
展開	・「臓器移植」に対する「賛成・反対」の立場を示し、その理由を英語で述べる。	・ワークシートに英語で理由を書く。 ・活動が終わった生徒同士で英語の表現を確認し合い、まだ終わっていない生徒を手伝う。	・ワークシートに、１５語以上の英文で理由を書くように指示する。 ・理由がうまく書けない生徒には、テキストの表現を参考にして書くように指示する。 ・机間指導をして、生徒の英語表現をチェックする。 ・作業が終わった生徒同士で英語表現を確認し合い、まだ終わっていない生徒を手伝うように指示する。 （12分）	【表現の能力】 「臓器移植」に対する賛成・反対・未決定の理由を自ら考え、語句・表現・文法の知識を活用し、正確な英文を書くことができる。 ［具体的な評価規準］ ① 語句・表現・文法の知識を活用し、自分の考えを１５語以上の正確な文にまとめることができる。 ② ②語句・表現・文法の知識を活用し、英文を書くことができる。 ③ Ａ：①を満たす場合 Ｂ：②を満たす場合
	・「臓器移植」に対する「賛成・反対」の表現を用いたコミュニケーション活動をする。	・教師とデモンストレーションをする。 ・パートナーを見つける。 ・ジャンケンをして、勝った方が質問をする（A）。負けた方が理由を答える（B）。 ・プリントに必要事項を日本語で記入する。 ・教室を自由に動き回り、自分と同じ意見を持つ人を５人見つけたら着席する。	・コミュニケーション活動のやり方を説明し、生徒とデモンストレーションをして見せる。 ・活動を始めるように指示する。 ・机間指導をして、コミュニケーション活動がうまくいっているか確認する ・パートナーをうまく見つけられていない生徒の相手役になる。（６分）	【関心・意欲・態度】 「賛成・反対」の表現を用いて積極的にコミュニケーション活動ができる。 方法：机間指導におけるグループ活動の観察 ［具体的な評価規準］ ① はっきりと大きな声で自分の考えを述べ、相手の発言にしっかりと耳を傾けている。 ② はっきりと大きな声で自分の考えを述べることができる。 Ａ：①を満たす場合 Ｂ：②を満たす場合
	・「臓器移植」に対する自分の立場とその理由を発表する。	・「臓器移植」に対する自分の立場とその理由を発表する。	・生徒を数名指名する。 （３分）	※１　※２

キ　検証授業の結果

授業後アンケートの結果では「考える時間が多かった」，「クラスメイトの意見を聞くことは，自分の考えを確かめたり整理したりするのに役立った」，「自分の考えを書いたり発表したりすることができた」及び「グループで話し合う活動をまたやってみたい」など肯定的な評価が８割以上という結果となった。また，「自分の考えが正しいかそうでないのかを，友人と話し合うことで判断できた」及び「グループ活動で，相手に伝えなければならないので，いつもより自分の考えを深くすることができた」などの感想が生徒から寄せられた。このことから，新聞，読み物，統計，その他の資料等を読み，自分の考えをまとめ，ペアワーク及びグループワークで自分の意見を発表し合う活動は，思考力・判断力を深める学習であるという結果が得られたと考える。また，アンケート結果から，生徒は，十分に確保された時間で自分の考えをまとめることは楽しい活動であると感じており，グループワークによって，自分と異なる意見に触れることでたくさんの刺激を受けていることを理解できた。さらに，特別な教材を準備しなくても，教科書の題材の扱い方を工夫することで，普段の授業の流れの中に位置付け，生徒の思考力・判断力を深める言語活動を比較的簡単に実施することができることもわかった。

ク　課題

今回の検証授業から，「新聞，読み物，統計その他の資料」を読み，ただ単に英文を解釈して授業を終わるのではなく，さらにその内容に基づいてペアワーク及びグループワークで言語活動を行い，意見を発表し合うことで，思考力・判断力が育まれていくことが予想される。しかし，今回の検証授業の対象集団は高等学校の１年生であったために，生徒によっては「臓器移植」に対する意見を述べるには英語力がまだ乏しく，内容が深まらないまま学習が終わる場面が見られた。また，間違った英語表現を用いてコミュニケーション活動をしている場面も多数見られたが授業内で指摘し，正しい英語表現に直す機会を十分に設けることができなかった。そこで，生徒が自分の意見を英語で発表するのに十分な準備時間を設定したり，言語活動に移る前に英語表現をチェックしたりすることも必要であると考える。また，生徒の英語力が伸びていくのに伴い，ポスターセッションでプレゼンテーションを行うなどの発展的な活動を加えて，さらに思考力・判断力・表現力を育む必要があると考える。

Ⅳ　研究のまとめ

21世紀は，新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ，社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す，いわゆる「知識基盤社会」の時代であり，このような時代を生き抜くためには，幅広い知識の習得とともに，生徒達が自ら考え，判断し，自らの考えを伝える力が求められている。これらの能力を育成するためには，以前のような講義中心の授業ではなく，日頃から生徒が思考・判断・表現する場面を多く設定することが必要となる。中でも問題解決を進めていく上で重要な活動の一つが言語活動であり，教科の特性に合わせて授業の中に適切に取り入れていくことが必要である。今回の研究では，言語活動を通し生徒の思考を促し，思考力・判断力・表現力を育成するという基本認識に立ち，どのような指導法が効果的か研究した。概ね言語活動を活かした授業が行われているとされる国語では，生徒達の交流を重視しグループで考えを深める学習場面を積極的に設定することによって，地理歴史では，資料を活用し協議する場面を設定することによって，理科では既習事項を基にペアワークを行うことによって，外国語は教科書の流れに沿ってペアワークとグループワークを活用することによってそれぞれ言語活動を通して思考力・判断力・表現力を高めることが可能であることが確かめられた。また，アンケートで多かった「言語活動を活かした授業をする時間がない。」という意見に対しては，プロジェクタやコンピュータ等のＩＣＴ機器を活用することで，効率的に授業を進めることが可能であることが確認できた。さらに，今回実施した検証授業は特別に設定したものではなく，通常の授業計画の中で，講義形式の授業を言語活動を活かした授業に変えて実施したもので，実施したことで進度に遅れが生じておらず，この点からも，時間をかけず効果的に言語活動を活かした授業を設定することが可能であることが検証され確かめることができた。

今後はさらに検証を重ね，より効果的な指導法を研究していきたいと考える。生徒の思考力・判断力・表現力は変化の著しい現代の社会において，生徒が自ら考え，行動し，未来を切り開いていくために必要な能力であり，限られた時間の中で，言語活動を通してその育成に努める必要があると考える。

＜引用文献＞

1　中央教育審議会答申　2008　『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導案等の改善について』，pp.24-25

＜参考文献・URL＞

中央教育審議会答申　2005　『我が国の高等教育の将来像』
文部科学省　2009　『高等学校学習指導要領（平成21年３月告示）』
岐阜県総合教育センター　2010　「授業改善アクションプラン」
http://www.gifunet.ed.jp/ssd/sien/gakuryokusougou_suisin/koutokugakkou/koutokuH22/01kokugoH22/H22_01_koku_index.htm (2012.11.22)
文部科学省　2010　『高等学校学習指導要領解説　国語編（平成22年６月）』
文部科学省　2009　『高等学校学習指導要領解説　理科編　理数編（平成21年12月）』